國學院大學学術情報リポジトリ

The Characteristic of Pottery Complex of the Asuka Area in the period of Nihon Shoki (The Chronicles of Japan) : Special Issue : The Present State and Future of Research About the Nihon Shoki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Oda, Yuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000615

飛鳥の土器と『日本書紀』

小田裕樹

はじめに

土器は考古資料の中で、もっとも普遍的な遺物の一つである。土を用いて必要に応じた形を作り、焼成する。そうして得られた土器は「うつわ」としての機能を果たし、食事をはじめとする様々な営みの道具として使用されていた。

『日本書紀』の舞台である飛鳥・藤原地域の発掘調査でも、多くの土器が出土する。飛鳥時代の土器には主に須恵器と土師器の2種があり、古墳時代から続く伝統的な器種[1]と中国・朝鮮半島の影響を受けて新たに出現する器種がある。飛鳥の土器は、これらの材質や由来が異なる多様な土器から構成され、その構成が大きく変化する点に特徴がある。

このように飛鳥の土器を種々の器種と型式の複合体（complex）と捉える視点に立つと、飛鳥時代や飛鳥の遺跡についてどのようなことを読み取ることができるのか。本稿では飛鳥時代の土器を中心に最新の研究成果を含めて論じ、『日本書紀』の時代とその舞台である飛鳥の歴史的特質の一端について、現時点での筆者の考えを示したい。

1．飛鳥の土器と2つの土器様式

（1）西弘海による飛鳥の土器様式研究

飛鳥の土器の変遷は、西弘海により大枠が明らかにされた。西は7世紀の土器について、当初4期に区分して変遷を捉え（西1982、脱稿は1974）、その後5期に区分する編年案を提示した（西1978、**図1**）。これが飛鳥Ⅰ～Ⅴのいわゆる飛鳥編年として定着する。この飛鳥編年については近年、見直しが進められており、第二章で詳しく取り上げる。

西の土器研究は、古墳時代から古代に至る土器様式の変遷とその歴史的背景を探るものであった。西は、各土器群の比較から様式標徴（merkmal）を抽出することにより土器様式を捉え、その成立過程と様式的特質から歴史的背景を探ろうと試みた（西1982）。

西は、飛鳥時代の土器について「金属器指向」を様式標徴とみて重視する。そして、7世紀初頭に金属製容器の直接的模倣による新器種が朝鮮半島の影響を受けて出現し、古墳時代の食器類に代わる「金属器指向型」ともいうべき様式の転換がみられるとした。この背景として、6世紀末葉以降わが国に導入された朝鮮三国の仏教文化の影響を考える。次に、7世紀後半の食器類を中心に「法量の規格性」を前提とする「法量分化」、「多

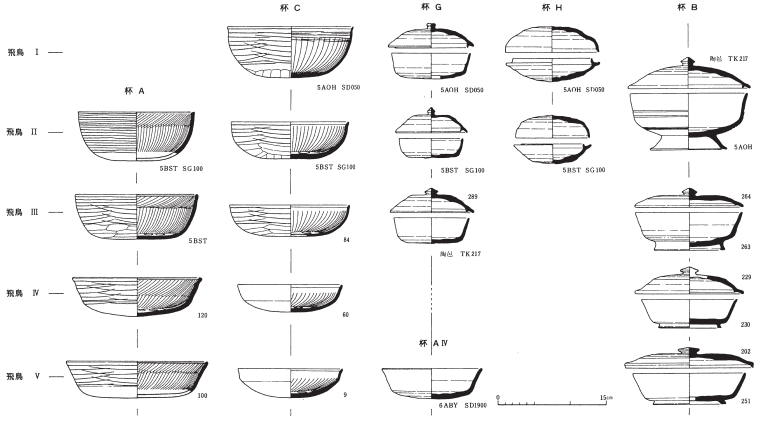

図1　西弘海による飛鳥の土器の大別（西1978）

様な器種分化」、「須恵器・土師器の互換性」という3つの特徴を挙げ、「金属器指向型」を基調としながらも、社会発展の方向と性格にあわせて独自な性格をもつものに発展したとする。そして、この土器様式に「いささか奇妙な表現」と躊躇しつつ「律令的土器様式」の名称を与えた。西は、律令的土器様式の成立は「律令制古代国家の中核をなす、官僚制の発展と大量の官人層の出現とその特殊な生活形態」を前提として理解できるとした。

西の研究は、飛鳥時代の土器様式の成立と展開が律令国家の成立・展開と関連することを見出したこと、土器の分析から律令国家・律令社会のあり方を読み解く歴史叙述の方法を示した点で高く評価できる。特に、土器様式変化の背後にある外的要因・内的要因を示しうる考古学的属性を見出し、その動態から歴史的背景の説明を試みる研究方法を提示した点が重要であり、飛鳥の土器研究を進める上で継承すべき視点である。

（2）飛鳥時代の2つの土器様式

筆者は、西の研究を受けて、飛鳥の土器について再検討をおこなった（小田2016b）。これは、西の提唱以降、律令的土器様式の概念に対して研究者によって多様な解釈が生じる状況があり（高橋1999）、西が対象とした飛鳥・藤原・平城地域の資料の再検討と新出資料の分析によって検証する必要があると考えたからである。

その結果、飛鳥の土器は、西による様相区分の飛鳥Ⅰ・Ⅱと飛鳥Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの間に、食器構成の大きな違いが認められることを見出した（小田2012a・2016b）。すなわち、須恵器杯H・杯Gおよび土師器杯C・高杯Cを基本器種とする飛鳥Ⅰ・Ⅱと須恵器杯A・B、土師器杯A・C・ⅢAを基本器種とする飛鳥Ⅲ以降では、複数器種にまたがる違いが認められ、これは土器様式の違いと捉えられる。このうち筆者は、飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器様式を「飛鳥時代前半期土器様式」と仮称し[2]、飛鳥Ⅲ以降の土器様式を西が提唱した「律令的土器様式」に該当すると解した[3]。

飛鳥時代に2つの土器様式が存在し、前者から後者への転換が認められる点が飛鳥の土器の最大の特徴といえる。次に両者を比較し、その特質を述べる。

飛鳥時代前半期土器様式　飛鳥時代前半期土器様式は、古墳時代以来の伝統的器種と金属器を指向する新たな器種の2つの系統の器種が併存する点が特徴である。

明日香村甘樫丘東麓遺跡SK184はこの土器様式の典型的な土坑出土一括資料である。SK184出土土器は土師器杯C・杯G・

高杯C、須恵器杯H・杯Gを主体とし（奈良文化財研究所2010、**図2**）、小型食器である土師器杯CⅢ・杯GⅢ、須恵器杯Gと反転した須恵器杯H蓋の法量がほぼ等しく、いずれも底部に丸みをもち、口縁部が直立気味に立ち上がるという形態が類似する。ここから、須恵器・土師器による丸底の小型杯類を基本として、土師器杯CⅠ・CⅡ、杯GⅡという相似形の大型・中型の杯やⅢAが加わる食器構成を復元できる（小田2012a）。また、土師器高杯Cも杯類と等量出土しており、高杯も基本的な食器であったと位置づけられる。

「律令的土器様式」　飛鳥Ⅲ以降の「律令的土器様式」は、新たな金属器指向型の器種が出現・定着する。また、飛鳥時代前半期土器様式に属する金属器指向型の器種を踏襲するいっぽう、古墳時代以来の器種がみられなくなる点が特徴である。

明日香村大官大寺下層SK121の土器群では、須恵器杯A、土師器杯A、須恵器・土師器杯Bが主体となり、須恵器杯Hはみられない（西口・玉田2001、**図3**）。これらの器種が台付・平底形態を特徴とすることから、小型丸底器種主体の飛鳥時代前半期土器様式とは異なる食器構成へと転換したものと評価する。この台付・平底器種主体の食器構成を基本として、飛鳥Ⅳ以降、大型法量の器種が増加し法量分化が複雑化するなど、各遺跡・遺構により多様な土器様相がみられる。この台付・平底器種を主体とする食器構成は、飛鳥時代後半以降、奈良時代に続く土器様式の基調であり、筆者はこの土器様式こそ西弘海が見出した律令的土器様式にあたると捉えている。

土器様式転換の意義　このように飛鳥時代前半期土器様式から「律令的土器様式」への変化は、小型丸底食器主体から台付・平底食器主体への食器構成の転換が本質と考えられる（**図5・6**）。この土器様式の変化の要因と背景は、東アジアにおける7世紀の土器の変化と比較することにより明らかになる。

朝鮮半島（百済・新羅）では7世紀前後に有蓋台付椀を主体とする食器構成へと変化する（**図4**）。これは中国に由来する金属製鋺を各国でそれぞれ模倣し、食器構成の中に受容した結果とみられる（小田2016a）。飛鳥時代の土器様式の変化についても同様に、有蓋台付椀を主体とする大陸的な食器構成を受容した結果と位置づけられる（小田2012a・2016b）[4]。

また小型丸底食器主体から台付・平底食器主体への食器構成の変化は、食器としての土器の使用方法と深く関連すると考える。すなわち、小型丸底形態の器種は手持ち食器（内山1997）であり、食器を持ち上げ手づかみで食事する食事作法と関連する。台付・平底器種は置食器であり、食器を台上に置き箸・匙

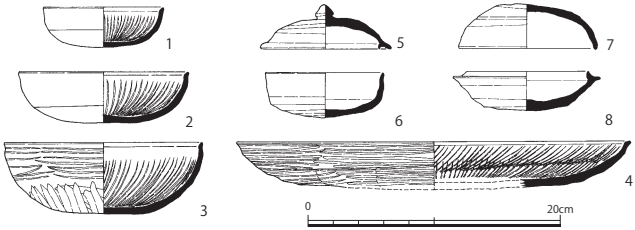

図２　飛鳥時代前半の食器構成（甘樫丘東麓遺跡SK184出土土器）

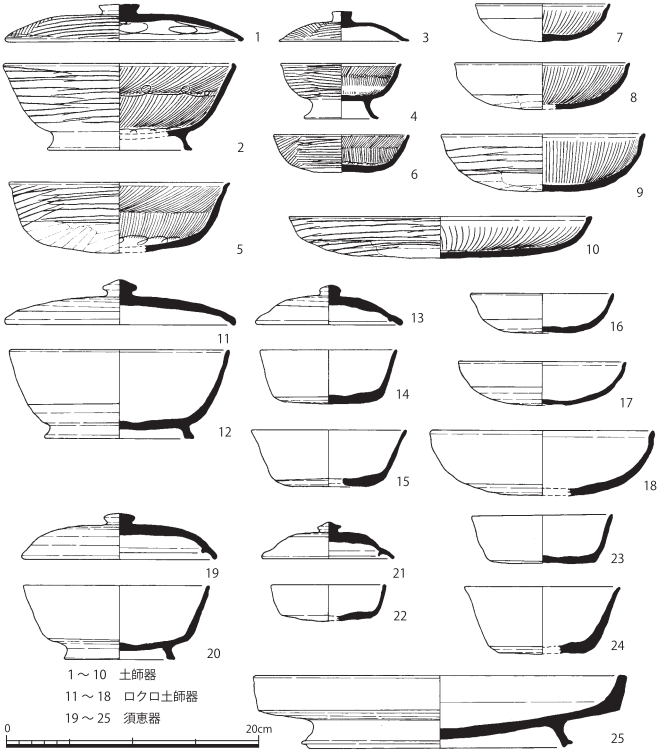

図３　飛鳥時代後半の食器構成（大官大寺下層SK121出土土器）

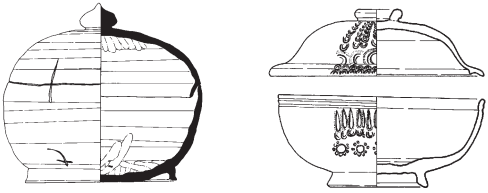

図４　朝鮮半島の有蓋台付椀
（左：百済扶余莘岩里遺跡、右：新羅慶州皇南洞建物跡）

を用いた食事に適する。筆者は古代日本の「律令的土器様式」の成立とは、台付食器を台上に置き、箸・匙を使用して食べる東アジア共通の食事作法の受容を反映し、饗宴・儀式の場での食事に関わる中国的な礼法の受容に関連すると考える。

飛鳥時代前半期土器様式と「律令的土器様式」は土器様式内に金属器指向型の器種を含む点では同じ特徴をもつ。しかし、飛鳥時代前半期土器様式は食器を持ち上げて手食する古墳時代以来の伝統的な食事作法に軸足を置いたうえでの新器種の受容であった。いっぽう「律令的土器様式」では、置食器を使用し、箸・匙を用いる大陸風の食事作法に対応した新たな食器構成へ転換していることから、食事作法・食事様式にまで及ぶ様式変化であったと考える。

これは古代日本が、隋・唐の成立に始まる東アジアの情勢変化を契機として、中国式の礼法や律令を継受し、その実践を試みた7世紀の一連の政治・社会動向（鈴木2011・大隅2011）と深く関連するものと考える。一例を挙げると前時代的な作法である匍匐礼に対して、中国式の跪礼や立礼の導入が図られている（新川1986、西本1998）。この受容過程からは、当該期に中国式の礼法の導入が図られたこと、その一方で新たな礼法の受容には前代以来の伝統的な行動様式との間で軋轢があったことが窺える。

飛鳥の土器様式の変化から読み取った食器構成・食事様式の変化についても同様の脈絡で理解することが可能と考える。2つの土器様式は、どちらも中国・朝鮮半島に由来する新たな食器を取り入れるが、飛鳥時代前半期土器様式から「律令的土器様式」への転換は大陸の影響をより強く受け、食事様式全般の転換をともなった変化であった（**図7**）。同時に、古代日本が大陸由来の新たな文化を受容するにあたり、食事の場面でも「旧俗」ともいえる古墳時代以来の伝統との対立があり、いかにこの相克を乗り越えるかが課題であったことが推測できる。

以上、本章では飛鳥の土器について、飛鳥時代前半期土器様式（飛鳥Ⅰ・Ⅱ）と「律令的土器様式」（飛鳥Ⅲ～Ⅴ）の2つの土器様式からなることを述べた。そして、この背景に古墳時代以来の伝統的な食事作法・食事様式から大陸風の新しい食事作法・食事様式への転換があったと考えた。

この理解に従うと、次に「律令的土器様式」への転換はいつ、どのような契機で起こり、いかなる過程を経て進んだのか、という問いが生じる。この課題を考える上で近年、重要なシンポジウムが開催された。本稿の内容とも深く関連するため、次章で詳しく述べたい。

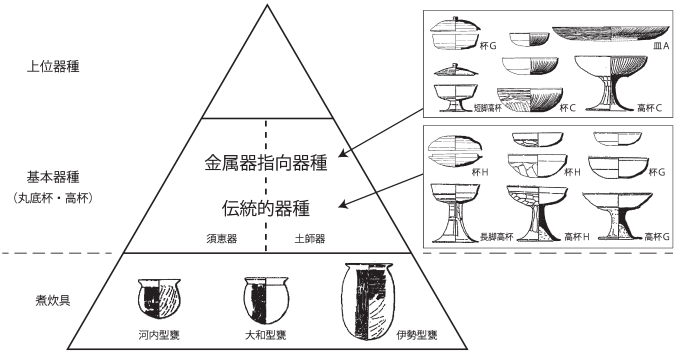

図５　飛鳥時代前半期土器様式の様式構造（小田2016b）

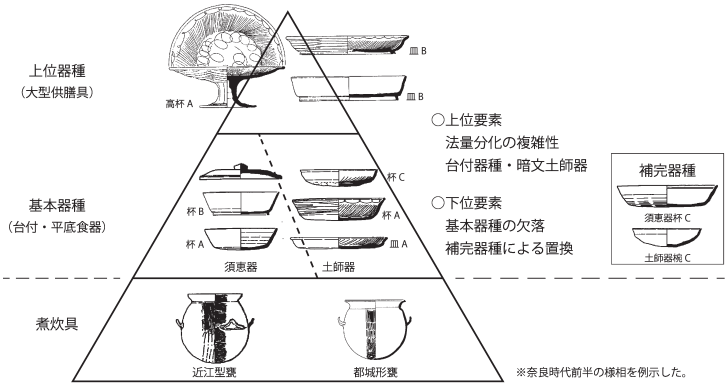

図６　「律令的土器様式」の様式構造（小田2016b）

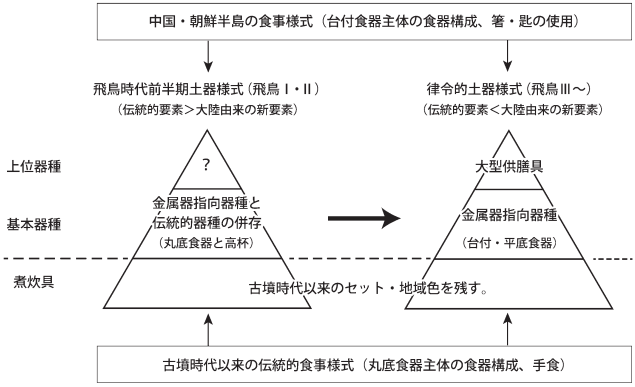

図７　飛鳥時代前半期土器様式から「律令的土器様式」へ（小田2016b）

2．飛鳥の土器をめぐる研究動向

（1）「飛鳥時代の土器編年再考」シンポジウム

2019年7月に奈良文化財研究所と歴史土器研究会の共催で「飛鳥時代の土器編年再考」と題するシンポジウムが開催された。このシンポジウムでは飛鳥編年の「高精度化」がキーワードとなり、飛鳥の土器に直接関わる4本の報告と難波および畿外の事例報告4本（うち一本は紙上報告）の研究報告がなされた（奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019）。

このうち、森川実と大澤正吾の報告では、飛鳥の須恵器と土師器についてサンプルの質や計測誤差などの取得データの質の吟味をふまえ、統計学的手法を用いた計量的分析の成果が示された（森川2019、大澤2019）。両者の研究は定量的属性を対象とし、方法論的な限界を考慮に入れた上でサンプルの吟味と質の確保を重視したこと、実物の計測を徹底しておこなうことにより計測誤差などのノイズを極力排した分析に特徴がある。これにより、須恵器・土師器の主要器種の口径の変化と時間的推移との関係や法量分化として従来捉えられてきた土器群中の口径の大小の実態などが明らかになった。さらに、森川は口径を軸に杯身と蓋のセット関係や食器構成原理の変化について考察し、大澤は定量的属性と調整・暗文・ヘラミガキなどの定性的属性を組み合わせて各土器群の変遷を捉えるなど、両者は土器編年の「高精度化」とその先にある歴史叙述の方法論的開拓を試みている。今後も進められるべき重要な研究成果である。

そして、須恵器を扱う森川と土師器を扱う大澤の「両者が噛み合って尾野報告を支えている」（森川2019）とされるように、尾野善裕の「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて」と題する研究報告（尾野2019）が本シンポジウムの核心といえる。そこで、次に尾野の研究成果を整理し、筆者の意見を述べる。

（2）尾野善裕による飛鳥編年の再検討と諸問題

尾野は西弘海の飛鳥編年（5期区分編年）について、暦年代観との齟齬や5期区分された「型式（期）」の複数にまたがる内容をもつ土器群の存在が認識され始めて久しく、この土器編年観は日本各地の古代遺跡の評価に大きく関わるとして再検討の必要性を提起し、以下の論を展開した。

①研究史整理と飛鳥編年の問題点　尾野は飛鳥編年の研究史を整理し、西の飛鳥編年の背景に小林行雄の形式（器種）・要素の消長で大きく類型区分する『唐古』様式論の影響をみる。そして、この編年方法は、同時期の土器群であっても基準となるべき形式（器種）や要素が欠落していた場合、時期的先

後関係に位置づけられてしまいかねない構造的な弱点があるとする。これは現在宮都の土器編年に求められている20年あるいは10年といった短い時間での変遷を議論する場合に問題があると指摘する。

②**有効な編年方法の吟味**　そこで、「出土状態からまとまりをもつと認識される土器群を編年するにあたり、特定の形式（器種）や要素の消長から大きな変化の方向性を読み取る」（5頁、本節の引用はすべて尾野2019）編年の方法は踏襲し、時期の細分をいかに進めるかを課題とする。そして、比較的近接した時期にあると推測される複数の土器群に一定量含まれている同一形式（器種）を比較し、その様相の類似性を手がかりとして土器群を分類（群別）・序列化することが有効との見通しを示す。これに古文献などから知り得る情報や共伴した紀年木簡で暦年代観を付与し、矛盾が生じなければ現時点では有効な仮説として成立する、として編年および暦年代観付与の方法を提示する。

③**分析と結果**　対象資料として飛鳥・藤原地域（平城地域の3例を含む）における計28例の「まとまりをもつ」土器群を取り上げ、「通時的な検討に適した形式（器種）」として飛鳥時代前半から半ばにかけては須恵器杯H（および蓋）、飛鳥時代半ばから後半にかけては土師器杯Cを対象とする。分析の結果、須恵器杯Hを最大径が漸移的に縮小する傾向から6様相に、土師器杯Cを扁平化する傾向から7様相に区分した。そして、各様相の組合せから土器群の序列を整理した（**図8**）。

④**暦年代観の付与**　区分した各様相に対して、「仮に15年を単位として年代観を付与してみると、既知の年代推定根拠と良く合致する」（11頁）ことから、「この15年区分編年観は有力な仮説として成り立ちうる」（同）とする。また、再度各土器群を吟味し、15年程度に年代幅を絞り込むためには同形式（器種）の土器が一定数以上ある土器群という条件を満たす必要があること、標本数が少ない場合でも2段階分＝30年程度を単位とする年代区分ならば、相当に信頼度を上げることができる、として編年の精度と有効性を確認する。

⑤**考　察**　以上の編年作業をふまえ考察に進む。特に東海産須恵器の宮都への大量供給がみられる画期と評価した「飛鳥浄御原宮期」の土器群に注目し、この時期の土器様相が多様性をもつことを指摘する。そして、これまで一概に年代差とされてきた飛鳥Ⅱ～Ⅴという様相差が使用階層の差として表出している可能性を提起する。そして、飛鳥Ⅲを特徴づける須恵器杯Bなど新しい土器形式（器種）の出現を新文化として

№	資料名	須恵器杯H	土師器杯C	根拠に基づく推定年代	仮定暦年代	飛鳥Ⅰ～Ⅴの相互関係
①	飛鳥寺下層	A様相	(－)	～588年	585～600年頃	
②	山田道（第３次）黒褐色土層					
③	古宮遺跡SD050	B様相	a様相		600～615年頃	飛鳥Ⅰ
④	甘樫丘東麓遺跡（第177次）谷埋立土					
⑤	甘樫丘東麓遺跡SX188青灰色粘土層	C様相			615～630年頃	
⑥	山田道SD3880					
⑦	川原寺下層SD02・SD367下層	D様相			630～645年頃	
⑧	山田寺下層SD619・整地土			～641年		飛鳥Ⅱ
⑨	甘樫丘東麓遺跡SX037			～645年		
⑩	飛鳥池遺跡SD809灰緑色粘砂層	E様相	b様相		645～660年頃	
⑪	甘樫丘東麓遺跡SK184					
⑫	坂田寺SG100	F様相	c様相		660～675年頃	飛鳥Ⅲ
⑬	西橘遺跡谷１			661もしくは672年木簡？		
⑭	水落遺跡貼石遺構埋立土			667もしくは671年～		
⑮	大官大寺下層SK121					672
⑯	藤原京左京六条三坊SE2355	(－)				飛鳥浄御原宮期
⑰	石神遺跡Ｂ期整地土	F様相	d様相		675～690年頃	
⑱	本薬師寺下層SD151・SD152			676～680年頃		飛鳥Ⅳ
⑲	雷丘東方遺跡SD110	(－)				
⑳	藤原宮下層SD1901A			685年～		
㉑	藤原宮朝堂院第二次整地土	F様相		685年～		
㉒	石神遺跡SD640	(－)	e様相	～694年頃	690～705年頃	694
㉓	飛鳥宮SD0901			～694年頃		飛鳥Ⅴ
㉔	藤原宮SD105		f様相	～710年頃	705～720年頃	
㉕	藤原宮SD2300			～710年頃		
㉖	平城宮SD8600			709～715年木簡		
㉗	平城京長屋王邸跡SD4750			710～717年木簡		
㉘	平城宮第一次大極殿整地土下		g様相	711～722年木簡	720～735年頃	

(－) は標本の不在を示す

図８　尾野善裕による飛鳥の土器群の様相対比と暦年代観（尾野2019）

捉えてきた従来の研究に対して、「海外渡来の新文化が地域・階層を超えて共時的に拡がるほど古代の日本は斉一的でもなければ、画一的な社会でもなかったはずだ」（14頁）と主張し、「宮都の土器はまさに宮都の土器であるというその特殊性によって、日本全体の中でもとりわけ特異な存在であったことを、研究の上では常に念頭においておく必要がある」（14頁）と指摘する。

以上のように、尾野の研究は飛鳥の土器に対して15年単位の「高精度」の編年を試み、その結果から「飛鳥浄御原宮期」における土器様相の画期と遺跡の性格による土器様相の違いを見出した。これは従来、西の「5期区分編年」の枠組みにとらわれる傾向のあった飛鳥の土器研究を大きく進展させる画期的な成果と評価できる。しかしながら、筆者は尾野が展開したいくつかの論点に関しては検討の余地があると考えている。このうち4項目について以下に論じたい。

研究史の理解　飛鳥の土器研究は西以来の土器様式研究と暦年代観の追究を含めた精緻な物差しを作る編年研究を２つの柱として進められてきた。尾野は飛鳥の土器についての研究史を整理するが（1～4頁）、後者の側面を重視したまとめ方である点に注意が必要である。

西が進めた土器研究の本来の目的は、土器様相の推移から土器様式の変化の背景を探ることである。「土器様式の成立とその背景」（西1982）で示した7世紀の土器編年は、古墳時代から古代にいたる土器様式の転換を読み取る前提として、当時確立していなかった7世紀の土器編年を試みたものであった。この目的のもと、小林行雄による『唐古』様式論を下敷きにしつつ、飛鳥・藤原地域の土器群を対象にして器種・型式の移り変わりを明らかにしたものである。『飛鳥藤原宮発掘調査報告Ⅱ』の「5期区分編年」（西1978）は「土器様式の成立とその背景」の編年をふまえたものであるが、当時の資料の限界もあり7世紀の土器の変遷を大づかみにとらえたもので、暦年代観の追究や「高精度化」を目的としたものではなかった。

これに対して、尾野は『報告Ⅱ』の「5期区分編年」について、「土器様式の成立とその背景」の区分指標を「むしろ詳述されている」として用い、その指標を「公式的に」当てはめると現在の資料状況からは齟齬が大きいと評価した（1頁）。

しかし、西が土器様式の変化を理解するために「土器様式の成立とその背景」で示した編年と各区分の指標は、尾野が目指す暦年代の追究と編年の「高精度化」とは元々の目的と視点を違えている。尾野が整理するならば、土器様式研究を本来の目的とした西の編年と尾野が意図するような「高精度の編年」との間で方法論的乖離が生じることに対する研究史上の議論と、（西の区分指標や編年手法とは無関係に）当該期の時間の変化を最も鋭敏に示す属性の抽出とその検知方法についての議論ではなかったか。西の区分指標を当てはめて「5期区分編年」自体を問題視する尾野の研究史整理と批判は適切でない。[3]

対象資料の一括性　尾野の編年は同一形式を手がかりに「まとまりをもつ」各土器群を比較し、分類（群別）・序列化する手法である。この手法自体は妥当であるが、尾野が扱う「まとまりをもつ」土器群の内容に幅がある点に注意が必要である。

特に、問題となるのは出土遺構における一括性の認定である。飛鳥編年の基準資料には土坑一括廃棄資料のほか整地土出土資料や溝出土資料が多数含まれる。これは、土器をはじめとする大量の塵芥を地中へ廃棄する特徴的な廃棄パターンを背景とし、紀年木簡との共伴や文献資料によって遺構や整地など土地の改変時期を押さえられる資料を多数有する古代宮都特有の事情による（小田2016b）。また、これらの資料を含めることにより、資料点数が確保されている側面もある。このような背景から、飛鳥・藤原地域の各資料の中には厳密な意味での「一括遺物」と、同一の遺構・層位から一緒に出土し、ある時間幅で

の同時性は認められても様々なコンテクストと年代幅を持ちうる「一緒資料」（中島2000、長2012）の両者が含まれている点に注意が必要である。

15年程度の時間幅を単位とする「同時存在」と出土状況に保証された「一括遺物」中における考古学的事実としての「同時存在」とは次元を分けて考える必要がある。尾野が主張するように従来飛鳥Ⅱとされてきた杯Hなど異なる様相区分の土器が「混入ではなく同時存在」であることを証明するためには、対象資料の厳密な一括性の認定が必須である。[6] 尾野の主張を裏付けるためには再度各土器群の「一括性」の吟味が必要である。

「15年程度の年代幅」の仮定と「飛鳥浄御原宮期」　尾野が付与した15年を単位とする仮定暦年代は、結果として筆者の年代観（小田2014b）とも違わない。しかしながら、機械的に15年の年代幅を割り振ったために2つの点に注意が必要である。

一つは、土器様相の変化の緩急が読み取りにくい点である。機械的な年代幅の中に土器群を含む手法であるから、各段階における土器様相の変化が緩やかに起こったのか、急激に起こったのかを検知できないという方法論的な弱点を抱えている。これは尾野も「各様相が等価な時間幅を有するという保証はない」と認識している（11頁）。あくまで各土器群が属する暦年代の目安として用いる場合には問題は少ないが、土器様相の変化を読み取る際には問題となる。

次に、土器様相の変化と歴史事象との対応関係を検討する際に偏った解釈が入り込みやすい点に注意が必要である。具体的には、尾野が宮都への大量の須恵器流入の画期とみる「飛鳥浄御原宮期（672～694）」の問題がある。

「飛鳥浄御原宮期」の呼称は、飛鳥Ⅴの「藤原宮期」に対応させたものと思われる。尾野が示した仮定暦年代で675～690年頃とされた石神遺跡B期整地土～藤原宮朝堂院第二次整地土が「飛鳥浄御原宮期」の中に入るのは問題ないが、その前様相の土器群は660～675年頃とされており、672年を境とする「飛鳥浄御原宮期」とそれ以前の土器群がいずれなのかが曖昧である。それにも関わらず、尾野は大官大寺下層SK121と藤原京SE2355の2つの土器群を「飛鳥浄御原宮期」に含めている（**図8**）。

しかしながら、この大官大寺下層SK121と藤原京SE2355の土器群は飛鳥Ⅲの土器様相であり、第一章で述べた「律令的土器様式」成立の画期となる土器群である。よって、その暦年代は重要な意味をもつ。この2つの土器群は年代根拠をもたない資料であり、尾野が画期として主張する「飛鳥浄御原宮期」の土器群に含められるかどうかは、別途議論が必要と考える。[7]

飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳの位置づけ　尾野は飛鳥Ⅲの土器群を飛鳥Ⅳの土器群と同じ段階とみて、飛鳥Ⅲ単独の段階を認めていない（**図8**）。尾野の分析結果をみると飛鳥Ⅲに属する大官大寺下層SK121と藤原京SE2355の土器群と飛鳥Ⅳに属する各土器群について、須恵器杯Hはどちらも F様相とする一方、土師器杯Cは前者をc様相、後者をd様相とし、様相の違いを認めている。また、土師器を分析した大澤は飛鳥Ⅳの土器群よりも古い様相に位置づけ、須恵器を分析した森川は飛鳥Ⅳの土器群との違いは見えないと評価する[8]。つまり、飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳの土器群の様相を比較すると土師器と須恵器で所見が異なっており、尾野の評価は須恵器の所見に重みを置いたものといえる。

須恵器からみると飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳの様相の最も大きな違いは、杯蓋の「かえり」のある・なしの量比である。従来、杯B蓋は「かえり」あり（飛鳥Ⅲ）、「かえり」あり・なし混在（飛鳥Ⅳ）、「かえり」なし（飛鳥Ⅴ）と変化することが想定されていた。これが、尾野らの研究により東海地域の窯では「かえり」のない蓋が多く、宮都近隣地域（近畿地方）の窯では「かえり」のある蓋が多いことが明らかになり、生産地の違いに帰する可能性が高いことが判明した（尾野ほか2016）。そして、飛鳥浄御原宮や石神遺跡へ大量供給された「かえり」のない杯蓋を「最新鋭の形式（器種）」（14頁）とする評価から、尾野は「かえり」のある・なしは同時期における遺跡の性格差を反映するとみて、飛鳥Ⅲの土器群を最新鋭の形式ではない「かえり」あり杯蓋を主体とする土器群と解釈したものと思われる。

ただ、この新たな解釈に拠る場合、なぜ生産地により杯蓋の「かえり」ある・なしが存在するのかについて疑問が生じる。第一章で述べたように、杯Bは「律令的土器様式」の成立に伴い、新たに出現する器種である。この新たな器種を製作するにあたり、表に目立たず機能的にもあまり意味を持たない「かえり」は不要である[9]。同時に出現する土師器杯Bの蓋には「かえり」がなく（**図3**）、藤原宮期以降は須恵器の「かえり」なし杯蓋が定着する点からも、「かえり」のない蓋とセットになるのが杯B本来の姿であったと考えられる。なぜ宮都近隣の須恵器窯で製作された出現当初の杯B蓋には「かえり」があるのであろうか。

筆者は「かえり」の有無は杯B製作時の指示方法の違いに起因すると考える。「かえり」のある杯蓋の形態は、同じく「かえり」を有する「杯G蓋」を拡大したものとみることができる。新器種「杯B」を製作する際に、既に杯Gを製作していた工人に対し「口径の大きな杯G蓋」として製作を指示していた可能

性を考え、既存の製作品・製作工程の延長線上で新たに「杯B」の製作をおこなったものと解する。[10] 一方、杯Gの製作経験が無い工人に対して、本来の杯B（「かえり」のない蓋）の製作を指示した可能性を考えたい。これは「かえり」のない杯蓋を製作した土師器工人に対しても同様であったと考える。

「かえり」のある蓋の多くが畿内の窯で生産されたとみられる点をふまえると、宮都近隣地域では既存の生産・供給体制を利用して杯Bを調達したこと、杯Hを主体とした生産をおこなっていた東海地域では新たな製作工程と供給体制の構築が図られて杯Bを調達したことを意味しているのではなかろうか。[11]

須恵器杯蓋の「かえり」ある・なしと生産地の関係をこのように理解するならば、飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳの土器群の関係についても、土師器に様相差を認める所見をふまえて時期差とみる解釈も可能である。すなわち、出現当初の杯Bは宮都近隣地域で既存の体制を利用して製作・調達されており（「かえり」あり、飛鳥Ⅲ）、その後、東海地域での生産・供給体制が整ったことをふまえて畿内の窯とともに杯Bの安定的な大量調達が可能になった（「かえり」あり・なし混在、飛鳥Ⅳ）と解釈する。

このように飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳの土器群の関係から「杯B調達体制の整備と拡充」を読み取るならば、筆者が第一章で課題に挙げた「律令的土器様式」の成立と転換の過程を具体的に描くことができる。「律令的土器様式」の成立当初は宮都に近い地域を中心に従来の体制を基盤として新たな食器の調達がおこなわれ（飛鳥Ⅲ）、その後「飛鳥浄御原宮期」に至り、東海地域での高品質な食器類の生産・供給体制の整備などをふまえて各地から宮都への大量供給がおこなわれた（飛鳥Ⅳ）。このように「律令的土器様式」の転換は段階的に進んだものと考える。[12]

「飛鳥浄御原宮期」における東海産須恵器の大量流入の背景として、東海地域に経営基盤をもつ天武天皇との関係に結び付ける尾野の評価（尾野ほか2016）は理解しやすく、筆者も妥当と考える。しかし、土器様式の転換という側面からみると、「飛鳥浄御原宮期」に古墳時代的な伝統の払拭を伴って、新たな土器様式を導入する理由付けが弱いように思われる。筆者は食事作法という生活様式まで一変させうる大陸風の土器様式への転換は、国内的要因のみでは説明が難しく、背景に強い外的要因・インパクトを読み取るべきと考える。

『日本書紀』から飛鳥Ⅲに該当する時期（660年代後半から670年代）[13] の政治・社会情勢をみると、白村江の敗戦による混乱と唐の侵略に対する危機感という緊張状態の中で、急速に国家体制の整備を進めた時期にあたる。この過程で大陸的な食事作法・

食事様式への転換が図られ「律令的土器様式」が成立したものと推測する。そして、国際的な脅威が弱まり、壬申の乱後の強大な王権のもとで中央集権化が進められた「飛鳥浄御原宮期」に東海地域をはじめ各地の須恵器窯から「律令的土器様式」に属する食器を安定的に調達し、宮都における大量の需要に応えつつ食器構成の充実化が図られたのではなかろうか。[14]

「律令的土器様式」が成立する飛鳥Ⅲの暦年代については、白村江の敗戦以後の社会情勢についても視野に入れておくべきであり、「飛鳥浄御原宮期」に限定せず、多様な考古資料・文献資料の検討に基づいた幅広い議論が引き続き必要と考える。

（3）飛鳥の土器研究の方向性

今回のシンポジウムでは、飛鳥編年の「高精度化」を目指す分析手法に重きが置かれ、主要器種の計量的分析による飛鳥の各土器群の配列については精度の高い結果が得られた。一方で分析対象が限られた器種に絞られたこともあり、土器様式研究の立場からは、土器群全体を構成する器種の組み合わせと組成の変化にも目配りが必要であったと考える。[15]

それでは、編年の高精度化を目指す研究と土器様式研究では別々に土器編年をおこなうべきなのか。筆者は、各器種を対象とする精度の高い計量的分析と土器群全体の組成分析の両者の利点をとり入れた新たな方向性を探るべきであると考える。筆者は、ここにセリエーションの手法を適用すべきと考える。

セリエーションとはモノの変遷を視覚的・数量的に示す手法であり、編年された各土器群の配列と土器群中の複数の器種・型式の量的推移を表す際に効果的な手法である（上原2009）。これは、特徴的な廃棄パターンを背景とする「まとまりのある」土器群を多く有する古代宮都の土器編年に有効な方法と考える。また、この方法は土器群そのものを対象とするため、出土土器全体の組成分析と、残存度の高い個体を抽出して計量的分析をおこなうことの両立が可能である。信頼度を高めた計量的分析により各土器群の配列をおこない、各器種・型式の量的推移から変化の緩急を読み取る。同時に特殊遺物や上位器種・補完器種の存否と多寡から各遺構や出土遺跡の階層差や性格についても読み取ることができる。筆者は、このような方向性の土器研究が今回のシンポジウムの成果を発展させつつ、古代宮都土器編年を再構築するために最適であるとの見通しをもつ。[16]

編年表試案の提示　そこで、筆者なりに尾野・森川・大澤の研究成果と併せた暫定的な編年表試案を提示しておきたい（**表1**）。[17]**図8**は尾野の分析結果に基づく飛鳥の土器群の配列および仮定

暦年代を示したものであるが、森川・大澤の分析結果を取り入れたものではなかった。そこで**表1**では、森川・大澤の分析結果を併記した。これをみると分析の対象と方法がお互い異なる3者の様相区分と土器群の配列に大きな齟齬はなく、各資料の前後配列の確からしさを追認できる。

また、先に「一括遺物」と「一緒資料」を区別する必要性について述べた。そこで各資料の出土状況についてA～Cの等級づけをおこなった。Aが土坑などの閉じた遺構における一括廃棄で、出土状況から廃棄の同時性が極めて高く、使用の同時性についても類推可能な「一括遺物」である。B・Cは溝埋土や整地土・谷埋立土など層位的に一緒に出土したものである。このうち、飛鳥・藤原地域の特徴ともいえる、文献資料により溝の埋め立てや整地などの土地利用の改変年代が類推可能な資料についてはBとした。B・Cは一緒に出土し同時期に廃棄された可能性は高いが、同一層中の土器の由来に様々な要因を考えることができるため、厳密な一括性は求められず「同時存在」の根拠にできる資料ではない点に注意を必要とする。

次に、器種構成の変化を読み取るために、飛鳥時代前半期土器様式および「律令的土器様式」の基本器種である土師器杯C・杯A・皿A・高杯Cと須恵器杯H・杯G／A[18]・杯Bの出現頻度を示した。本来、セリエーションの手法を適用するのであれば土器群中の各器種の比率を示さねばならないが、各土器群の全量が報告されていない現状から、次善の策として各報告で図示された点数を記号化して示した。したがって、出土した土器群全体の中から図化・報告された個体を対象としている点に注意が必要であり、今後の更新が必要である。

各器種の出現頻度をみると、①全時期を通じて存在する器種（土師器杯C）、②途中で出現し、増加する器種（土師器杯A・皿A、須恵器杯G／A・杯B）、③当初から存在するが途中で少なくなる器種（土師器高杯C、須恵器杯H）がある。7世紀を通じて新器種が出現・増加する中で杯Bは突如出現しているようにみえる。また一方で、須恵器杯Hは杯Bの出現・定着と反比例するように減少する。杯Hは、大官大寺SK121以降の土器群では報告されている個体数がいずれも1点であることから[19]主体となる器種ではなく、杯Bをはじめとする他の器種との差異は大きいと判断する。なお、これらの杯Hは等級B・Cの整地土や溝埋土から出土した資料である。このように各器種の出現頻度からみる土器組成の変化は、第一章で述べた飛鳥時代前半期土器様式から「律令的土器様式」へ転換する状況を示していると考える。

須恵器							年代推定根拠	仮定暦年代	飛鳥Ⅰ～Ⅴの相互関係	
杯H		杯G	杯H	杯G/A		杯B				
尾野 2019	森川 2019	森川 2019						尾野 2019		
A様相			△				飛鳥寺造営開始 588年以前	585～600年頃	飛鳥時代前半期 土器様式	「律令的土器様式」
A様相	Ha群		●							
B様相	Ha群		●					600～615年頃	飛鳥Ⅰ	
B様相	Ha群		●							
C様相			●				山田寺造営開始 641年以前	615～630年頃		
C様相	Hb群		●	△						
D様相	Hb群		○					630～645年頃		
D様相	Hb群	Ga群	●	○						
D様相	Hb群	Ga群	●	●						
E様相	Hc群	Ga群	●	●				645～660年頃		
E様相	Hc群	Ga群	●	●						
F様相	Hc群	Ga群	●	●			斉明朝漏刻 660年	660～675年頃	飛鳥Ⅱ	
F様相	Hc群	Gb群	●	●						
F様相	Hc群	Ga/b群	○	△						
F様相	Hc群	Gb群		●		●				飛鳥Ⅲ
		Gb群		●		○				
F様相	Hc群	Gb群	△	●		●	本薬師寺 680年発願	675～690年頃		飛鳥Ⅳ
F様相		Gb群	△	△		●				
		Gb群		●		●	天武末年木簡 694年以前			
		Gb群		●		●				
F様相	Hc群	Gb群	△	●		●				
		Gb群		●		●		690～705年頃		
			△	●		●				
				●		●	藤原宮期 (694～710)	705～720年頃		飛鳥Ⅴ
				●		●				

杯G／A、杯Bは身をカウントした。

表１　飛鳥・藤原地域の主要土器群の変遷

No.	資料名	文　献	出土遺構	等級	土師器 杯C 尾野2019	杯C 大澤2019	杯A 大澤2019	杯C	杯A	Ⅲ類A	高杯C
1	飛鳥寺下層	年報1999Ⅱ	整地土	B							
2	山田道（第３次）黒褐色土層	年報1999Ⅱ	谷堆積土	C							
3	古宮遺跡SD050	報告Ⅰ	溝埋土	C	a様相	Ca群		○			△
4	甘樫丘東麓遺跡（第177次）谷埋立土	紀要2014	谷堆積土・整地土	C	a様相			△			○
5	甘樫丘東麓遺跡SX188・青灰色粘土層	紀要2010	谷堆積土	C	a様相	Cb1群		○			△
6	山田道SD3880	年報2000Ⅱ	溝埋土	C	a様相	Cb1群		●			△
7	川原寺下層SD02・SD367下層	概報10、年報1997Ⅱ	溝埋土	B	a様相	Cb1群		●			○
8	山田寺下層SD619・整地土	概報20、山田寺発掘調査報告	溝埋土・整地土	B	a様相	Cb1群		●			○
9	甘樫丘東麓遺跡SX037	概報25	谷堆積土・整地土	B	a様相	Cb1/2群	Aa群	●	△		○
10	飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層	概報22	谷堆積土	C	b様相	Cb2群		●		△	△
11	甘樫丘東麓遺跡SK184	紀要2010	土坑一括	A	b様相	Cb2群		●		△	●
12	坂田寺池SG100	概報３、紀要2018	池堆積土	C	c様相	Cc群		●	○	●	●
13	西橘遺跡谷１	相原2019	谷堆積土	C	c様相	Cc群	Ab1群	●	○	●	●
14	水落遺跡貼石遺構埋立土	報告Ⅳ、紀要2016	溝埋土・整地土	C	c様相	Cc群	Ab1群	●	○	△	
15	大官大寺下層SK121	概報６、紀要2001・2002	土坑一括	A	c様相	Cc群	Ab1群	●	●	●	●
16	藤原京　SE2355	概報９、小田2012	土坑一括	A	c様相	Cc群	Ab1群	●	○	●	○
17	石神遺跡B期整地土	紀要2018	整地土	C	d様相	Cd1群	Ab2群	●	●	○	
18	本薬師寺下層SD151・SD152	川越2000	溝埋土	B	d様相	(Cd1群)		○	○	○	
19	雷丘東方遺跡SD110	報告Ⅱ	溝埋土	C	d様相	(Cd1群)	(Ab2群)	○	○	○	
20	藤原宮下層SD1901A	概報８、紀要2016	溝埋土	B	d様相	Cd1群	Ab2群	○	●	○	
21	藤原宮朝堂院第二次整地土	紀要2013	整地土	B	d様相	Cd1群	Ab2群	●	○	○	
22	石神遺跡SD640	紀要2018	溝埋土	C	e様相	Cd1群	Ab2群	●	●	△	
23	飛鳥宮北外郭SD0901	橿考研『飛鳥京跡Ⅳ』	溝埋土	C	e様相	Cd1群	(Ab2群)	●	○	●	○
24	藤原宮内裏SD105	報告Ⅲ	溝埋土	C	f様相	(Cd2群)	(Ac群)	○	●	△	
25	藤原宮東面内濠SD2300	概報９、紀要2012	溝埋土	C	f様相	Cd2群	Ac群	●	●	●	△

概報：『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』　年報：『奈良文化財研究所年報』　△：１点、○：２～４点、
報告：『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』　紀要：『奈良文化財研究所紀要』　●：５点以上

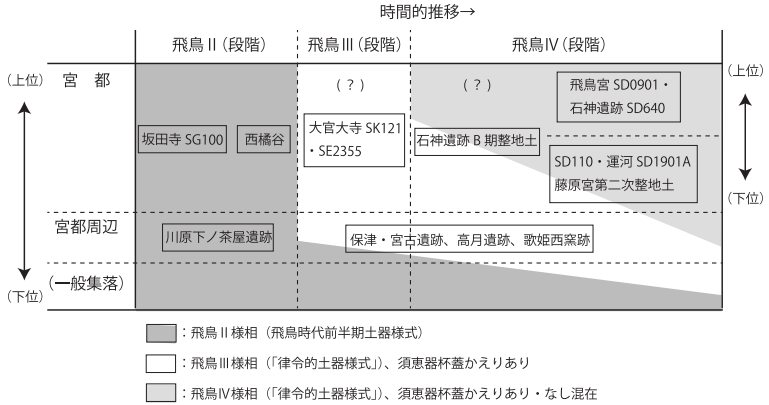

図９　飛鳥Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの関係概念図

飛鳥Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの関係について　次に飛鳥Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの各土器群の関係性を整理した（**図９**）。これは各土器群の様相差には時間的推移に起因するものと遺跡の性格・階層差に起因するものがあるとみて、横軸に相対的な前後関係＝時間的推移をとり（段階とする）、縦軸に遺跡の性格による上位・下位の相対的な階層差をとり、各土器群を位置づけたものである。遺跡の階層差については、古代宮都周辺の土器様相を対象とした筆者の土器様式構造の分析結果（小田2016b、**図６**）に基づき、上位器種の多寡、法量分化の複雑性、基本器種と補完器種との関係をもとに判断したほか、尾野が最新鋭の形式とみた「かえり」なし蓋の多寡についても考慮した。

飛鳥Ⅳ段階をみると、飛鳥浄御原宮で使用されたと考えられる飛鳥宮SD0901土器群、石神遺跡Ｂ期官衙で使用されたと考えられる石神遺跡SD640土器群が上位にあたり、藤原宮の造営に使役された役民らの土器の可能性がある運河SD1901Aや藤原宮朝堂院第二次整地土土器群が相対的下位に位置づけられる。この段階では宮都内部において上位・下位の階層差が発現している。

飛鳥Ⅲ段階として、先述のように大官大寺SK121と藤原京SE2355土器群を飛鳥Ⅳの土器群よりも古く位置づけた。この

段階では飛鳥Ⅳ段階と同様の宮都内部における階層差が見られるかどうかは不明である。一方で、宮都周辺や一般集落では飛鳥時代前半期土器様式に属する飛鳥Ⅱ様相が残存していた可能性がある。同様に飛鳥Ⅳ段階でも、飛鳥Ⅱや飛鳥Ⅲ様相が残る遺跡・遺構が存在していた可能性が想定される。

このように飛鳥・藤原地域の古代宮都中枢部では飛鳥Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ段階の時間的推移がみられる一方で、遺跡の性格や階層の違いによっては前段階の土器様相が残存する可能性がある。これが尾野の指摘する「遺跡の性格差による土器様相の違い」の実態ではないかと考える。飛鳥の遺跡の性格差と様相区分された土器様相との相関関係については、以前から注意されてきた視点ではあるが（西口1999）、尾野の指摘の重要な点は、土器の供給体制と関連付けて宮都中枢部に東海産須恵器など最新の製品が供給され、周辺部では旧来の器種や古い土器様相が残ることを読み解いた点にある。これにより先進的な食器が中枢部に供給される一方、「飯場」とされるような下位の性格をもつ遺跡・遺構では前段階の土器様相が残存していたことを想定できるようになったと評価する。[20]

このように各土器群の様相差から時間的推移だけでなく遺跡の性格・階層差について読み取る手がかりを得たことは、今後の飛鳥の土器研究にとって大きな意義をもつ。従来は土器様式の展開を時間的推移による単線的な発展過程として読み取るだけであったが、遺跡の性格差や階層差を考慮に入れて立体的に土器様式の広がりや受容過程を読み取る可能性を拓いたものといえ、出土土器の分析から歴史叙述に近づく方法として一歩前進したものと評価できる。

筆者は「律令的土器様式」への転換は宮都中枢部（上位遺跡）ほど早く起こり、周辺（下位遺跡）では使用階層や使用局面によって杯Hや飛鳥時代前半期土器様式が残存していたと考えている。今後は再び各遺跡・遺構に戻って、土器様式の転換の過程を丁寧に読み解く必要がある。宮都の土器は「日本全体の中でもとりわけ特異な存在」ではあるが、その特異性に注目することで宮都中枢から列島各地の土器への影響の度合いや土器様式の転換過程を明らかにしうる。**図9**と同様の縦軸と横軸の視点で各地の土器様相の観察と分析をおこなうことにより、地域社会が律令国家の成立にともなって古墳時代以来の伝統との相克の中でいかなる変容を遂げたのかを明らかにしうると考えている。今後はその実践と方法論の錬磨が課題である。

3．水落遺跡貼石遺構埋立土出土土器とその由来

（1）水落遺跡と貼石遺構埋立土出土土器

最後に、明日香村水落遺跡貼石遺構埋立土出土土器を取り上げて、飛鳥の土器と『日本書紀』との関連について触れたい。

水落遺跡は飛鳥寺の北西、石神遺跡の南方に位置する（**図10**）。水落遺跡では周囲に貼石がみられる基壇建物が検出された。この基壇建物は、基礎部分に強固な地中梁構造をもつこと、内部に銅製の導水管および漆木箱の抜取穴をもつことなどをふまえ『日本書紀』天智6年（660）に中大兄皇子が設置した漏刻台に比定された（奈良国立文化財研究所1995）。

この貼石遺構周辺から出土した土器について、報告書では漏刻機能時～廃絶後の堆積層として一括し、小型化した須恵器杯Hの存在と杯Bがみられないことを根拠に飛鳥Ⅱの最新段階とした。また土器群の暦年代が660～667年にあたるとして、飛鳥Ⅱの下限年代を示す重要資料と位置づけた（西口1995）。

水落遺跡出土の土器群について尾野善裕らは各個体の出土位置と層位を点検し、貼石遺構周辺埋立土出土土器として再抽出した。そして、この中に10点余りの尾張産須恵器（**図11**）が含まれることを明らかにした。また、667年の大津宮への漏刻移転と貼石遺構の埋め立てとの間には時期差があることを論じ、これらの土器群を天武朝の所産とみることも可能として「飛鳥浄御原宮期」の宮都への尾張産須恵器の大量供給と同じ脈絡の中に位置づけた（尾野ほか2016）。

漏刻移転と貼石遺構の埋め立てとの間に一定の時間差をみる尾野の指摘は支持できる。しかし、貼石遺構埋立土出土土器群の暦年代は、大津宮に漏刻を移設する667年を上限年代とできるのみで、天武朝の所産と限定できるかについては検討が必要である。

再度、貼石遺構埋立土から出土した土器群をみると、この土器群は飛鳥Ⅱの土器様相であり飛鳥時代前半期土器様式に属する。また、尾野らが明らかにしたように多数の尾張産須恵器（杯H[21]）の存在が特徴といえる。この2つの特徴は、東海産須恵器の比率が高い点で共通する石神遺跡B期整地土やSD640出土土器群のそれが「律令的土器様式」に属する器種（杯B・杯A・椀A）であることと対照的である。このため、筆者は両土器群を同一の脈絡として位置付けることに躊躇する。

そこで、水落遺跡周辺で漏刻の移転後に「飛鳥時代前半期土器様式」に属する「尾張産須恵器」が持ち込まれる契機があったのではないか、という視点で別の解釈を探りたい。貼石遺構埋立土出土土器群は尾野の仮定暦年代によると660～675年頃にあ

たる。また、先に貼石遺構埋め立ての上限年代を667年とみた。667～675年頃に水落遺跡周辺におこった歴史事象について『日本書紀』を参照すると壬申年（672）の壬申の乱および「小墾田兵庫」の存在が注目される（星野1978・飛鳥資料館1987・倉本2007）。

(2) 壬申の乱と小墾田兵庫

小墾田兵庫は672年6月29日の飛鳥古京の攻防の場面で表れる施設である。飛鳥では飛鳥寺西に近江側留守司の高坂王が穂積臣百足等とともに陣営を張り、百足は「小墾田兵庫」にいて、兵を近江に運んでいた。この陣を大海人側の大伴連吹負が攻撃し、小墾田兵庫にいた百足を飛鳥寺西の槻の下に召喚した。この経過から、飛鳥寺西に飛鳥留守司の陣営があり、至近の距離に小墾田兵庫が存在したことが窺える。

小墾田兵庫の位置については、後述するように大量の鉄鏃の出土を根拠として石神遺跡近辺に比定する説があり（奈良国立文化財研究所1985）、さらに検討を進めた相原嘉之と重見泰の研究がある。相原は飛鳥地域の地名比定から石神遺跡が小墾田の地に含まれることを示し、石神遺跡の調査所見をふまえて小墾田兵庫を石神遺跡B期遺構群に比定した（相原2011）。ただし、石神遺跡B期整地土の時期が、尾野らの研究により「飛鳥浄御原宮期」とされたことから、壬申の乱（672年）時点で存在していた小墾田兵庫と石神遺跡B期遺構群では時期が逆転することになる。

筆者は、小墾田兵庫を石神遺跡に比定する諸説に賛同するが、B期ではなくA期段階の遺構群ではないかと考える。特に、石神遺跡A3期西区画をみると南北80mを超える長舎に囲まれた空間内部に四面廂建物が数棟存在し、その南部に総柱建物SB1701・1702がある（**図11**）。長舎に囲まれたロの字形の空間内に総柱建物が複数棟存在する点は、他のロの字形の空間（小田2020）と比較すると特異である。[22] 筆者は、A3期西区画南部は当初SB1900の前庭空間として利用されており、ある段階（仮にA4期とする）にSB1701・1702を建て小墾田兵庫の倉庫として利用した可能性を考える。これは重見泰の見解とも同じである（重見2007）。

また、石神遺跡第4次調査では「藤原宮期」と報告される土坑や整地土から100本以上の鉄鏃をはじめ大量の鉄製品が出土した（奈良国立文化財研究所1985）。この「藤原宮期」の土坑・整地土は、SK764（尾野ほか2017）を含むように尾野らの出土土器の再検討によって「飛鳥浄御原宮期」とされた「石神遺跡

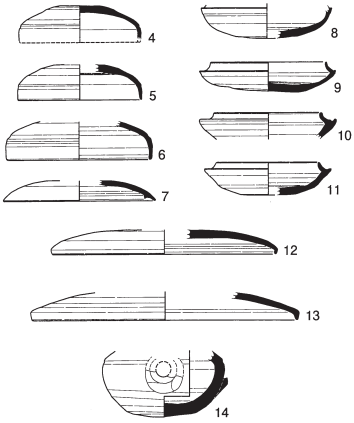

図11　水落遺跡貼石遺構埋立土出土の尾張産須恵器（尾野ほか2016）

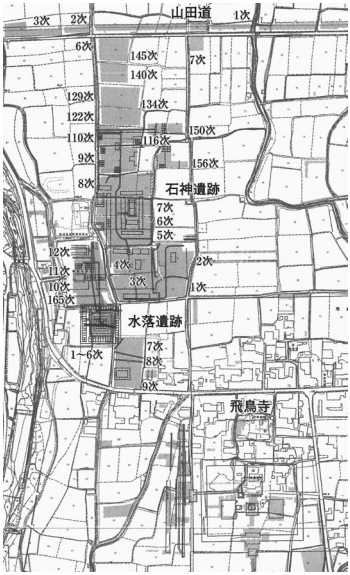

図10　水落遺跡周辺遺跡分布図　1:8,000
（奈良文化財研究所2016を一部改変）

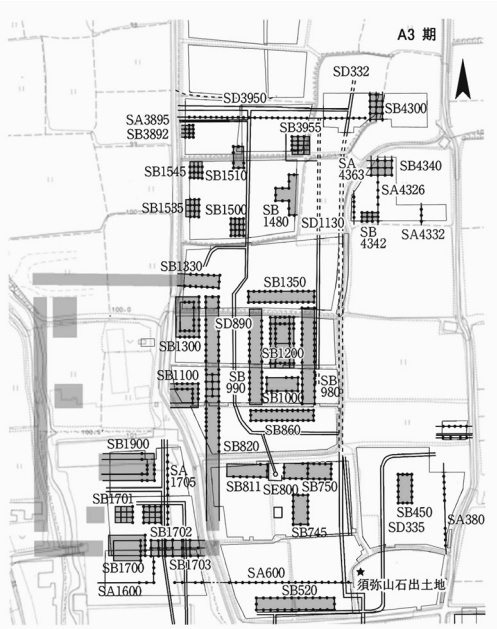

図12　石神遺跡A ３期遺構群遺構配置図　1:3,000（青木ほか2009）

B期整地土」を含む。石神遺跡B期整地土は石神遺跡の西南部を中心に広く検出されている整地層であり（森川・大澤2018）、大量の鉄鏃や鉄製品もこの整地土に関連する可能性がある。また、石神遺跡A3期の饗宴施設で使用されたと推定される中国産の施釉陶器も「石神遺跡B期整地土」と一連の層位出土とみられる（第11次調査含炭褐色土、小田2012b）。

石神遺跡B期整地土は「飛鳥浄御原宮期」の一連の工事に関わると評価されるが（尾野ほか2016）、その出土遺物は饗宴施設（A3期）や壬申の乱時の小墾田兵庫（A4期）を含む石神遺跡A期遺構群に由来する遺物を含む可能性が高い。

さらに、水落遺跡の漏刻廃絶後の堆積層から出土したふいご羽口やとりべ・鉄滓は、石神遺跡B期整地土と関連が深いと考えられている（尾野ほか2016）。石神遺跡A3期遺構群と水落遺跡の漏刻が同時期であるから（奈良国立文化財研究所1991、奈良文化財研究所2011）、これらの遺構を覆う石神遺跡B期整地土と水落遺跡貼石遺構埋立土との関係に矛盾はなく、両者の関連性は頷ける。よって、貼石遺構埋立土が石神遺跡B期整地土と同様、壬申の乱時の小墾田兵庫周辺で使用された遺物を含む可能性は考え得る。

（3）尾張産須恵器杯Hの由来について

筆者は、水落遺跡貼石遺構埋立土の尾張産須恵器杯Hを壬申の乱時の小墾田兵庫や飛鳥寺西の軍営と関連して位置づけたいと考える。

『日本書紀』によると6月27日に不破郡家に入った大海人皇子のもとに、尾張国司守小子部連鉏鉤が「二万の衆」を率いて帰順した。「二万」の数は文飾としても、尾張国内から徴集された多数の兵士が大海人軍に従軍していたことが分かる。7月2日に、大海人は兵士を3方面に分け、紀臣阿閉麻呂・多臣品治・三輪君子首・置始連菟を遣わし、「数万の衆」を率いて伊勢の大山を越えて大和に向かわせた。この大和方面軍はその後、飛鳥古京や奈良盆地を舞台として戦闘を繰り広げており、大和に向かった「数万の衆」が飛鳥寺西の軍営や小墾田兵庫周辺に滞在していた可能性は高い。この中に小子部連鉏鉤が率いた尾張出身の兵士が振り分けられていた可能性は十分に考えられるだろう。

第二章で述べたように、壬申の乱の時点すなわち「飛鳥浄御原宮期」以前の東海地域では、「律令的土器様式」の杯Bや大型食器類を宮都に大量供給する体制は整っていなかったと考えられる。この段階の尾張地域では、古墳時代以来の伝統的器種

である杯Hを主体として生産し、日常的な食器として使用していたと考えられる。尾張地域出身の兵士が杯Hを携えて従軍していた蓋然性は認められる。

このように、土器様式研究の成果をふまえつつ『日本書紀』の記述や飛鳥の遺跡・遺構の状況を併せて考えると、貼石遺構埋立土から出土した尾張産須恵器杯Hが、壬申の乱の際に飛鳥古京方面に従軍した尾張出身の兵士が持ち込んだ什器であったとみる解釈も可能である。(23)

おわりに

『日本書紀』の時代は、律令国家の成立に向かい列島社会が大きく転換する時代である。飛鳥時代は古代の開始期として捉えられる傾向が強いが、当該期は古墳時代の終末と古代の始まりという2つの時代の転換期であり、古墳時代社会からどのような過程を経て律令社会へと転換するのかという視点で捉える必要がある。

飛鳥のみならず列島各地においても古墳時代以来の伝統的な生活様式・社会構造が、中国・朝鮮半島の法制度や社会規範等を導入した宮都の影響を受けつつ、どのような過程を経て、古代的な生活様式・社会構造へと変容していたのかを描き出すことが重要である。このとき、遺跡・遺構・遺物から新規の要素や伝統的要素を抽出し、その変化の過程を明らかにできる考古学の手法は強い利点を持つ。

このような問題意識のもと、本稿では西弘海が先駆けた土器様式研究の発展を試みた。今後はこの方法を洗練させるとともに、その他の考古資料も含めて、広く実践することが必要である。

『日本書紀』を語る上で考古学が寄与する可能性は大きいと考える。引き続き研究を進めたい。

謝　辞

本稿の執筆にあたり以下の方々、諸機関の助言・援助を得た。青木敬　大澤正吾　片山健太郎　金田明大　神野恵　玉田芳英　廣瀬覚　松永悦枝　森川実　若杉智宏　奈良文化財研究所

また、尾野善裕氏には氏が奈良文化財研究所在籍時に、本稿の内容とも深く関わる飛鳥編年および飛鳥の土器に関する諸方面にわたる筆者との議論に粘り強くお付き合い頂いた。記してお礼を申し上げるとともに、本稿における理解不足があればすべて筆者の責任であることを明記する。

なお、本稿の成果の一部は科学研究費課題番号-18K01080および課題番号20H01354を含む。

註

（1）本稿では、器形の種類の略語として器種の語を利用する。また、飛鳥時代の土師器・須恵器は奈良文化財研究所により器種分類名が与えられており、本稿でもこれを踏襲する（奈良文化財研究所2017）。

（2）「飛鳥時代前半期土器様式」の用語を使用するが、あくまで飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器様式に対する仮称である（小田2016b）。筆者はこの土器様式を「古墳時代終末期の土器様式」とも捉えているが（小田2018）、その前段階に当たる古墳時代の土器様式についての分析と比較検討が未了であり、その当否を論じることができない。古墳時代から古代全般を通した土器様式研究の深化が急務であり、今後の課題である。

（3）西弘海は飛鳥Ⅰ・Ⅱが律令的土器様式に該当するのかどうかについて、明確には述べていない。この点について筆者は、飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器群の中に「金属器指向型」の器種と金属器を指向しない杯Hをはじめとする古墳時代以来の器種が含まれていることから、「金属器指向」を様式標徴とする同一の土器様式として捉えることに躊躇したのではないかと推測している（小田2016b）。筆者の「飛鳥時代前半期土器様式」の提唱は、この問題点を解決しうると考える。

（4）金属製鋺を模倣した有蓋台付椀形態の受容という視点で百済・新羅の土器を見ると、百済の有蓋台付椀は蓋と身のセット関係を重視しているのに対し、新羅の有蓋台付椀は蓋と身のセット関係が明瞭ではなく、口径が合う蓋を被せている。この蓋と身のセット関係の強弱からみると、日本の杯Bは新羅と共通する（小田2016a）。飛鳥Ⅲにおける土器様式の転換の背景として亡命百済人の影響が指摘されているが（西口・玉田2001）、筆者は新羅の影響も考慮する必要があると考える。

（5）この尾野の研究史理解および基本姿勢は以下に論じる筆者の意見との相違に深く関わる。概して尾野は土器群への暦年代観付与と「高精度」の編年の確立を重視する。

（6）飛鳥Ⅲの土器様相を示す土坑出土資料である田原本町保津・宮古遺跡SK05・2125、大和郡山市高月遺跡SX01では須恵器杯Hが出土していない（小田2016b）。これらの資料から、使用時における杯Hと杯Bの排他的な関係を類推できる。一方で平城京左京二条二坊十五坪の廃棄土坑SK11240からは奈良時代前半の土器とともに杯Hが1点出土している（奈良文化財研究所2019）。これを混入とみるか残存とみるかは、同時期の「一括遺物」において「共伴関係」が重ねて観察できるかどうかによるだろう。

（7）尾野は大官大寺下層SK121の位置づけについて、土師器杯Cにやや新しい様相を見て天武朝（672～686）初期の土器群とみなすことも「不可能ではない」とする（15頁）。そして『日本書紀』天武天皇2年（673）の「造高市大寺司」任命記事と、高市大寺を文武朝大官大寺の下層に想定する大脇潔の説を引用し（大脇2014）、SK121をはじめとする大官大寺下層遺構を「造高市大寺司」関連遺構と解釈する。暦年代や遺構の性格を示唆する出土文字史料をもたないSK121の遺構解釈としては一考に値するが、「高市大寺」の所在地については、古代史・考古学の立場から現在も論争が続いている（小澤2003・2019、木下2005、風間2010、西本2011）。大脇の文武朝大官大寺下層説は、その中の一説であるという点に注意する必要があり、高市大寺および大寺司の所在地は土器の暦年代観のみで解決できる簡単な問題ではない。

（8）森川は大官大寺SK121土器群の口径分布がサンプル数の多い石神遺跡

B期整地土出土土器群の口径分布の中に含まれており、排他的な関係にあるとは言えないことから無理をしないとの評価である（森川2019）。飛鳥Ⅲと飛鳥Ⅳを積極的に同じ様相とみているわけではない。

（9）「かえり」なしの杯蓋に比べて「かえり」がある杯蓋は、製作時に「かえり」を作り出すひと手間がかかり、使用時においても「かえり」径に合う口径の身を選ぶ必要があることから、むしろ不合理ともいえる。

（10）出現当初の杯Bは高台が高い点に特徴があるが、これは壺類の脚部を付けたものと見ることもできる。新器種である「杯B」について、宮都近隣の須恵器窯では「口径・器高を拡大し、脚台をつけた杯G」との認識で製作がおこなわれていた可能性も推測できる。また、森川により蓋が付くことが明らかにされた須恵器杯A（杯Gb群、森川2019）は、まさしく「口径を拡大した杯G」である。

（11）筆者は旧稿で須恵器杯蓋にみられる「かえり」の有無について、別系統の器種交替を示すのではないか考えた（小田2014b）。器種交替の当否についてはともかく、「かえり」の有無が生産地の違いを示すことが明らかになったことにより、異なる「製作指示」方法が反映していた可能性を考えたい。

（12）飛鳥Ⅲを律令的土器様式の「萌芽的成立」とする従来の評価（西口・玉田2001）を支持する解釈である。

（13）この年代観は大官大寺下層SK121と藤原京SE2355の両土器群が属する段階についての尾野の仮定暦年代（660～675年頃）とも整合する。

（14）この食器構成の充実化の過程で森川が指摘する藤原宮SD2300の食器構成原理の変化（森川2019）が起こった可能性がある。

（15）森川の計量的分析では、データの質を確保するために口径復元の誤差が出にくい1／4以上（参考値としては1／6以上）の破片を分析対象としているため、各土器群の点数は実際の出土点数を意味しない。一方、土器組成の分析においては土器群中の各器種・型式の量比と存否が検討項目であるから、1／6未満の破片も含めた実際の出土点数が重要である。

（16）同様の意図のもと筆者は前稿において器種構成の変遷を表す表を作成した（小田2016b、別表）。しかし、これもあくまで各報告書の図版や組成表から作成したものであり、セリエーションの適用としては不十分である。古代宮都で大量に出土する土器のうち、時期を認めやすい食器類や特徴的な遺物が優先的に抽出・図化・報告される傾向にあり、現状ではセリエーションの実践は難しい。しかしながら奈良文化財研究所では各基準資料の再整理と検討を進めており（西口・玉田2001、高橋2012、小田2012a・2017、若杉2018）、今回のシンポジウムでの問題提起を起爆剤として、土器群全体を対象とした報告と研究の機運がより一層高まることが望まれる。

（17）筆者は旧稿において飛鳥の土器編年について整理している（小田2014b）。筆者の認識に大きな変化はないが、尾野らにより計量的分析にも耐えうる良好な資料が提示された状況をふまえ、一部の資料および表現方法を更新したい。なお、前稿との大きな違いは飛鳥Ⅰの古段階に位置づけていた川原寺下層土器群を、山田寺下層土器群と同様相とみる点である。これは大澤・森川の分析結果をふまえ修正したい。

（18）筆者は従来無蓋器種とされていた奈文研分類杯Aに蓋が付くとする森川の指摘（森川2019）を支持する。筆者は飛鳥Ⅲの須恵器を焼成した奈良市歌姫西窯跡出土杯蓋の口径分布および無台杯外面の降灰の観察から杯Aに蓋が付く可能性を考えた（小田2014a）。森川の指摘は、消費地である飛鳥中枢部でも杯Aに蓋が付くことを明らかにしたものと理解する。今後は杯Aと杯Gは蓋の有無ではなく、無台杯という一つの大形式の中で器種細分の是非が検討されるべきであろう。この時、無台杯の丸底、平底という視点が重要と考える。

（19）杯H身の点数である。この時期の杯H蓋は無台杯（杯G／A）や壺蓋

との見分けが難しいものがあるため排した。

(20) これは保守的な性格が想定される墳墓副葬土器についても同様で、古墳副葬土器の組成に違いが生じることは十分に想定できる。また杯Bなどの「律令的土器様式」に属する土器が副葬される古墳の性格にも注目すべきである（小田2018）。

(21) 図10—12・13は報告書では出土層位および出土地点を根拠に、水落遺跡B期以降の遺物と判断されている（奈良国立文化財研究所1995）。

(22) 長舎内部に複数の総柱建物がある類例として、鎌倉郡衙とみられる神奈川県今小路西遺跡Ⅱ期遺構がある。

(23) これは先に指摘した水落遺跡貼石遺構埋立土出土土器群の組成の特異性を説明すると同時に、石神遺跡B期整地土＝「飛鳥浄御原宮期」以降、「律令的土器様式」に属する東海産須恵器を宮都に大量供給したとみる尾野と筆者の先の想定とも矛盾しない解釈である。なお、石神遺跡については現在報告書を作成中であり、概報や尾野らにより一端が公表された土器以外の多くの遺物の出土層位や遺構との関係については不明のままの立論である。特に、石神遺跡B期整地土と水落遺跡貼石埋立土土器群の組成の違いについて、筆者は各種遺物の由来と分布の違いを想定するが、各遺物の出土位置・層位に関する情報が不明なため想像の域を出ない。報告書刊行後の検証が必須である。ただ、この検討次第では後世遺物の混入と評価された水落遺跡の「かえり」のない尾張産須恵器杯蓋（図10—12・13）を石神遺跡B期整地土と同様、石神遺跡B期官衙の造営に関わる遺物として再評価できる可能性もある。

文　献

相原嘉之2011「飛鳥古京の攻防」『琵琶湖と地域文化』林博道先生退任記念論集刊行会、113—120頁。

相原嘉之2019「西橘遺跡出土土器」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、20—33頁。

青木敬・小田裕樹・石田由紀子2009「石神遺跡（第21次）の調査」『奈良文化財研究所紀要2009』、76—85頁。

飛鳥資料館1987『壬申の乱』

上原真人2009「セリエーションとは何か」『考古学—その方法と現状—』放送大学教育振興会、129—148頁。

内山敏行1997「手持食器考」『HOMINDS』vol.1、CRA.

大澤正吾2019「飛鳥時代における土師器杯C・杯Aの変遷とその区分」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、54—74頁。

大隅清陽2011『律令官制と礼秩序の研究』吉川弘文館

大脇潔2014「国分寺と都城の寺院」『季刊考古学』第129号、雄山閣、42—47頁。

小澤毅2003「寺名比定とその沿革」『吉備池廃寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、149—161頁。

小澤毅2019「高市大寺の所在地をめぐって」『古代寺院史の研究』思文閣出版、177—192頁。

小田裕樹2012a「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所、265—290頁。

小田2012b「石神遺跡出土施釉陶器をめぐって」『花開く都城文化』飛鳥資料館、104—110頁。

小田裕樹2014a「杯蓋の分類」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所、47—55頁。

小田裕樹2014b「土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所、66—79頁。

小田裕樹2016a「日韓における有蓋台付椀の成立と展開」『日韓文化財論集3』奈良文化財研究所、145—168頁。
小田裕樹2016b「古代宮都とその周辺の土器様相」『官衙・集落と土器2』奈良文化財研究所、159—201頁。
小田裕樹2017「平城宮斜行溝SD8600出土の土器」『奈良文化財研究所紀要2017』、286—299頁。
小田裕樹2018「群集墳の終焉について」『群集墳研究の新視角』古代学研究会拡大シンポジウム、105—124頁。
小田裕樹2020「飛鳥地域におけるロの字形配置の建物群について」『難波宮と古代都城』同成社、376—390頁。
尾野善裕2019「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、1—18頁。
尾野善裕・森川実・大澤正吾2016「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要2016』、94—106頁。
尾野善裕・森川実・大澤正吾2017「飛鳥地域出土の湖西産須恵器」『奈良文化財研究所紀要2017』、176—181頁。
川越俊一2000「藤原京条坊年代考」『研究論集XI』奈良国立文化財研究所、1—32頁。
木下正史2005『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川書店、217—227頁。
倉本一宏2007『壬申の乱』（戦争の日本史2）吉川弘文館。
重見泰2007「石神遺跡の再検討」『考古学雑誌』第91巻第1号、44—80頁。
新川登亀男1986「小墾田宮の匍匐礼」『日本歴史』458、1—19頁。
鈴木靖民2011『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館。
高橋照彦1999「「律令的土器様式」再考」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会、602—616頁。
高橋透2012「藤原宮東面内濠SD2300出土土器（1）」『奈良文化財研究所紀要2012』
長直信2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産」『古文化談叢』第67集、九州古文化研究会、55—107頁。
中島恒次郎2000「大宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』XV、日本中世土器研究会、183—219頁。
奈良国立文化財研究所1985「石神遺跡第4次調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報15』、55—68頁。
奈良国立文化財研究所1991「石神遺跡第10次調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報22』、53—63頁。
奈良国立文化財研究所1995『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』
奈良文化財研究所2010「甘樫丘東麓遺跡の調査—第157・161次」『奈良文化財研究所紀要2010』92—106頁。
奈良文化財研究所2011「水落遺跡の調査—第165次」『奈良文化財研究所紀要2011』106—114頁。
奈良文化財研究所2016『奈良文化財研究所紀要2016』
奈良文化財研究所2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ』
奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019『飛鳥時代の土器編年再考』
奈良文化財研究所2019「左京二条二坊十五坪の調査—第601次」『奈良文化財研究所紀要2019』190—205頁。
西弘海1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所、92—100頁。
西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会（脱稿は1974年）、447—471頁。
西口壽生1995「5小結」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』、90—92頁。
西口壽生1999「和同開珎銀銭と伴出した土器」『奈良文化財研究所年報1999—Ⅱ』、12頁。
西口壽生・玉田芳英2001「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究所紀要2011』26—29頁。

西本昌弘1998「元日朝賀の成立と孝徳朝難波宮」『古代中世の社会と国家』大阪大学文学部日本史研究室、101—119頁。
西本昌弘2011「高市大寺（大官大寺）の所在地と藤原京朱雀大路」『古代文化』第63巻第1号、45—64頁。
星野良作1978『研究史　壬申の乱』吉川弘文館
森川実・大澤正吾2018「石神遺跡B期整地土・SD640出土の土器群」『奈良文化財研究所紀要2018』、146—153頁。
森川実2019「飛鳥時代における須恵器食器の法量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、34—53頁。
若杉智宏2018「坂田寺池SG100出土の土器群」『奈良文化財研究所紀要2018』、154—165頁。

挿図出典

図1：西1978、図2：奈良文化財研究所2010より筆者作成、図3：西口・玉田2001より筆者作成、図4：小田2016a、図5・6・7：小田2016b、図8：尾野2019、図9：筆者作成、図10：尾野ほか2016、図11：奈良文化財研究所2016を一部改変、図12：青木ほか2009、表1：筆者作成。